



洛風だより・ほかほか通信

～保護者のみなさまへ～

感謝の言葉にかえて

あなたの知らないところにいろいろな人生がある

あなたの人生がかけがえのないように

あなたの知らない人生もまたかけがえがない

人を愛するということは 知らない人生を知るということだ



私は、毎年この詩を卒業生に送っていました。児童文学作家の灰谷健次郎氏の詩です。実は、この詩には忘れられない思い出があります。前任校で生徒指導によりに載せたことがありました。その時の教え子から、卒業後に手紙をもらったのです。私はその生徒とは3年の時に授業を受け持っていただけでほとんど話をしたことになかったので、とても驚きました。気にはなっていた生徒なのですが、おとなしく目立たない女の子でした。

手紙には「灰谷さんとの最初の出会いがこの詩です。その時私は涙が止まりませんでした」と書かれていました。彼女の手紙の中の一つ一つの言葉は、思春期の瑞々しい感性にあふれています。好きな作家や歌手、友への思い、高校生活の不安、教師への期待や裏切られたくない切実な願いなど様々なことが書かれていました。彼女の心の中にどれほどの思いが詰まっているのか、手紙を読むごとに私の心は揺さぶられました。また、児童自立支援施設や不登校の子どもためのフリースクールで働くにはどうしたらよいのか相談を受けたこともあります。彼女は将来、困っている子どもの役に立つ仕事につくことが夢だったようです。

その後、私は洛風中学校で多くの不登校を経験した生徒たちと出会うことになります。私は開校の時から、彼女が伝えようとしていたように、思春期の子どもたちの「心の痛み」を大切にできる学校にしたいと思いながらこの仕事に取り組んできました。洛風の子どもたちも何らかの「心の痛み」を持っています。辛い気持ちを受け止めてもらはず、裏切れ、心を傷つけてきた痛みです。その痛みは怒りであると思えることがあります。自分を否定された残念さは怒りとなって心を傷つける。その怒りが出てくる間は自分でも怖くて外に出られない。怒りを収める時間が必要になる。それが休むことではないか。その生傷が癒えてカサブタができたころ、ようやく動き出せる。この過程に一人で立ち向かうことは難しく、否定されずに自分を受け止めてもらえる人との出会い、安心や信頼の回復がある、ようやく怒りを収めるカサブタができるのではないかと思います。

生徒と向き合うということは、その子の残念さや怒りと向き合うことでもあり、一人一人の人生と向き合うことだと身に沁みて教えられてきました。

残念ながら、彼女は私とは直接話す機会もなく、二十歳を前に病気で急逝してしまいます。今、彼女が生きていれば、どんな話を交わせたかと思うと胸が痛みます。そして、彼女への追悼の思いとともに、彼女の夢は洛風の子どもたちにも届いていると伝えたいです。彼女との出会いは宿命だったと思います。

彼女の手紙は、私の未来に夢を託していたのだと思えてなりません。「どの先生も、子どもと真剣に向き合ってほしい、不登校やいじめられている子どもを守りたい」この彼女の願いは、洛風の風となってつながり、これからも生き続けていくと信じています。

今もし彼女に、「須崎、子どもたちとのかけがえのない出会いを大切にできたか」と尋ねられたら、「ごめんな、もっと向き合えたかもしれない」と答えるしかない35年間でした。



もうすぐ、3年生は卒業を迎えます。私も校長として最後の卒業式となります。私にとって洛風との出会いは、かけがえのない宝物です。いたらない点も多くあったと思いますが、今は皆様への感謝の気持ちで一杯です。長い間、ありがとうございました。